

世界の伝統的な笛の多様化の要因を考察する

Exploring the diversification of traditional flutes around the world

佼成学園高校 2年C組 玉置 瑞

Abstract : What is called “flute” or “fue” in Japanese is said to be the oldest musical instrument in the world. Although flutes have not changed its appearance and structure at all for about 40,000 years, traditional flutes all over the world vary scale, materials, playing techniques. This research has made it clear that the diversification of flutes is influenced by factors such as climate, materials, the status of the maker, and regional traditional music.

Keywords : flute, Shinobue, Swedish folk flute, Norwegian Sea flute

1. 研究背景

アイリッシュ音楽が好きでティンホイッスル(アイルランドの伝統笛)を演奏していたところ、人類はいつから笛を演奏しているのかという疑問をもった。鈴木・永留(2007)は、「笛という楽器は構造が単純なこともあり、世界中の至るところで人間の歴史と共に生み出され、その姿を大きく変化させることなく現代まで受け継がれている。」¹と述べている。加えて、笛は世界最古の楽器とされ、東京都にある国立科学博物館には、約3万7000年前の「白鳥の骨製のフルート」が、「確実な楽器としては世界最古である。」との記載とともに展示されている。これらのことから、笛は3万7000年もの間、その構造を全く変えていないことがいえる。

しかし、世界各地の伝統的な笛(比較的昔に作られ、特定の民族や国を代表する伝統音楽に深く関わりがある笛を指すものと定義する)は、中空の筒状のものに息を吹き込んで音を出すという笛本来の特徴を除いて、指穴の数や音階、音色、奏法などが多様で、特徴的な見た目をしている笛が多いという点に新たな疑問を抱いた。

2. 研究目的

笛は古代から存在し、中空の筒状のものに息を吹き込んで音を出すという単純なしくみであるにも関わらず、その国々で多様化している。この笛の多様化には、その国や地域特有の気候や歴史、文化が関係しているという仮説を立て、楽器博物館や文献を利用した調査により検証する。世界の伝統的な笛の多様化の要因を知れば、その笛にしかない魅力や文化価値などを新しく見出すことができると考えられる。

3. 研究方法

3.1 世界にはどれほどの数の伝統的な笛があるのかを知るための楽器博物館を利用した調査

楽器博物館に行き、世界の国々に存在する伝統的な笛を把握し、多様なそれぞれの笛の特徴を捉える。今回は武蔵野音楽大学(東京都練馬区)の楽器ミュージアム、民音音楽博物館(東京都新宿区)、浜松市楽器博物館(静岡県浜松市)で調査する。

3.2 楽器博物館では確認しきれない笛のほか、楽器博物館で見た笛の材質や歴史などの特徴の詳細を把握するための文献調査

楽器博物館の展示には、楽器の詳細な解説が少ない。そのため、笛の材質や歴史、風土や風習の結びつきなどの詳細を把握するために、ウェブページや民族楽器に関する書籍などでの文献調査を行う。

4. 結果・考察

3カ所の楽器博物館を訪れ、約80種類の世界の伝統的な笛を観察した。以下に、その観察から見出されたことと文献調査によって得られた情報から考察したことを列挙する。

4.1 気候に影響を受けた笛達

東アジア、東南アジア、南アジアでは、他の地域と比べて伝統的に竹製の笛が多いことを確認した。徳永・荒木(2007)は「竹は気候が温暖で湿潤、あるいは熱帯地域に分布が限られている。また、アジアの竹林面積は世界の面積の8割程度を占めている。」²と述べていることから、アジアの多くの地域で、気候と植生の特徴から竹製の笛が多いことは必然であると考えられる。例外として、モンゴルではリンベと呼ばれる動物の骨製の笛が伝統的に存在するが、これはモンゴルが草原や砂漠が広がるステップ気候であり、竹が生育しないことから動物由来の笛が誕生したと考えられる。西アジア、中央アジア、中南米ではネイ(トルコ)、ゴシュメ(イラン)、カワラ(アラブ諸国)、ケーナ(ボリビア)などの葦を切っただけの単純な構造の笛が多いが、これもこれらの地域に竹が自生していないため葦を用いたと考えられるのが自然であろう。

また、高緯度のヨーロッパや北米では、笛として直接利用しやすい中空で筒状の植物が限られてくるためか、ツァ

ファラ(ブルガリア)やシュペリカ(マケドニア)、スヴィレル(ロシア)、ソピルカ(ウクライナ)、フヤラ(スロバキア)、柳の笛(ノルウェー)などの柳や松、梅、桜、ツゲなどを加工した木製の笛が多いと考える。

以上より、笛の材質は植物などのその土地で入手できる資源、つまり気候の影響を強く受けていると結論付けた。

4.2 作成者の身分に影響を受けた笛達

日本には篠笛と呼ばれる伝統的な笛が知られている。Mikoshi Storys の記事には「日本の祭りや囃子などで使用される篠笛は、竜笛や高麗笛、神楽笛などで奏でる雅楽を聞いたことがない庶民(貴族や武家などの権力者でない人間)が竜笛を簡易化させて作成した笛」³と述べられている。

また、スウェーデンでは、フォークフルートと呼ばれるリコーダーに似た形状をしている笛がある。ケルトの笛屋さんのウェブページには「それらの笛は当時バロック音楽で奏でるリコーダーを手にすることができなかった、スウェーデンの羊飼いがそれを模して作成したとされているからだ。」⁴と述べられている。同じく北欧のノルウェーでは、シーフルートと呼ばれるリコーダーに似た笛があるが、この笛もスウェーデンのフォークフルートと同様で、ケルトの笛屋さんのウェブページに「バロック音楽を知らないノルウェーの海辺の人間達がドイツから北海を渡ってきたリコーダーを下から順番に吹いた音階を出すリコーダーを身近にある木材から簡素化して作った笛である。」⁵と述べられている。

これらの3つの笛の事例から、当時貴族や権力者しか嗜むことができなかった音楽を奏でる笛を、身分の低い庶民が真似て制作したということが言える。華やかな装飾や技術は取り払い、奏法や音階に関しても、もとの笛とは全く違うものになった。このことから、笛の多様化の要因に作成した人物の身分が関係していることがわかる。

4.3 もともとその土地にあった伝統音楽に影響を受けた笛達

モンゴルやトゥヴァ共和国にはツォールという菌にあてて吹く特殊な奏法をもつ笛がある。楽器辞典のウェブページには、この特殊な奏法が生まれた背景には、「モンゴルではホーミー、トゥヴァ共和国ではフーメイと呼ばれる喉歌を歌いながら吹くために生まれた」⁶と述べられている。

また、定説として、楽器はシルクロードを利用した音楽文化の交流により、さまざまな地域に伝来していったとされる。しかし、世界には、形が似通う中でも多様な伝統楽器がある。つまり、どこの国も直接その楽器を自国や地元の音楽に使用せずに、もともとその土地にあった楽器と合奏できるように、新しく作り替えたことがいえる。特に弦楽器のように、調弦ができず、指穴の位置や数によって出すことのできる音階や音数が固定される笛は、その影響を他の楽器よりも多く受けていると考える。

これらの理由から、笛という楽器が他の楽器よりも、元来その土地にあった伝統音楽の影響を受けやすいことから笛の多様化につながったと考える。

5. 結論・今後の展望

今回調査できたものだけでも、世界には約80本の伝統的な笛が存在することがわかった。また、姿や形が似通う中でも多様性があるのは、素材となる各地域で取れる資源、つまり気候に影響を受けたことや、その笛を制作した人間の身分が影響したこと、もともとその土地にあった伝統音楽の影響を受けやすかったことが要因であると考えた。

なお、定説として、笛を含めて楽器は、宗教儀礼との結び付きが強いとされている。実際に1.で紹介した笛の誕生の要因にも、約3万7000年前の人類による宗教儀礼が密接に関わっている。しかし、今回の調査でも各宗教圏での笛の違いの観察も行ったが、宗教の違いが笛の多様化に影響を与えたとは考えられなかった。

笛の多様化の要因は他にも存在すると考えている。例えば、4.2で紹介したフォークフルートは羊飼いの、シーフルートは漁師(北欧)、能管は能楽師、神楽笛は神主、尺八は僧(日本)の例のように、その笛を作成した人物の職業も関係するのではないかという新たな仮説も生まれてくる。博物館や文献では把握することができなかった笛の調査を進めるとともに、更なる笛の多様化の要因を考察していきたい。これらの知見を増やしていくことで、まだ先行研究の少ない世界の伝統笛の成り立ちを体系化し、笛から見出される地域特有の文化の伝承に繋げていきたい。

6. 参考文献

1. 鈴木しおり 永留純也(2007).「笛を通して見る北方圏文化の特徴とその考察」浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要, 第7号 111-118
2. 徳永陽子 荒木光(2007).「竹林と環境」京都教育大学環境教育研究年報第15号 99-123
3. Mikoshi Storys 「和のフルート?庶民の楽器、篠笛」 <https://mikoshistorys.com/shinobue-1891.html> 2024年12月13日
4. ケルトの笛屋さん「北欧の笛について」「ヘリエーダルス・ピーパーHärjedalspipan」(2022). https://celtnofue.com/instrument/hokuounofue/houkou_detail---id-210.html 2024年11月17日
5. ケルトの笛屋さん「北欧の笛について」「シーフルート-Sjøfløyta」(2022). https://celtnofue.com/instrument/hokuounofue/houkou_detail---id-216.html 2024年11月17日
6. 楽器辞典「木管楽器の仲間」「ツォール」 https://saisaibatake.amezaiiku.com/musical_instrument/gakki_jiten_tsuur.html#google_vignette 2024年11月17日